

ポスターあれこれ・会報アレコレ

1975年、初回東京展ポスターは粟津潔デザインの、当時を象徴するかのごとく華々しいものであった。未だにネットオークションなどで取り扱われる人気の高いアート作品となっている。薔薇の花をメインとした別バージョンや、横長のバージョンもあり、貼る場所を意識した作り分けとなっているのも特徴。

それ以降のポスターがどんなものであったか、記憶のある人もほとんどいなくなり、今後の研究が待たれるという状況。

しかし第4回東京展では、『ソ連亡命作家展』が内部企画としてあり、ソ連の作家を全面に押し出したインパクトの強いデザイン。さらに1980年の第6回展においては増井和弘氏のデザインと思われる幾何学抽象があしらわれ、その後の東京展の内容を予見している。

しかしいつからか、どういう理由かは分からないが、真っ赤な地に白く大きな『東京展』という文字だけが印象的なデザインが十年、二十年と続くことになる。他の団体と歩調を合わせたのだろうか？

青柳氏主導でポスターコンペが行われ、2013年から儘田能光氏のコミカルなデザインで雰囲気を一変する。幾何学的な顔でインパクトを、さらにスカイツリーで『東京』の今を想起させる内容。

2018年からも儘田氏が担当し、男女の顔がモチーフとして採用される。図録も儘田氏のデザインとなり、表紙を開くと男女が向かい合う、という面白い趣向となっている。2024年からも儘田氏の第3期デザインで、こけしを思わせる正面を向いた顔。砂時計をも連想させる。果たして今後どのように変化していくのか楽しみである。



1975年 第1回東京展ポスター



1978年 第4回展



1980年 第6回展



2012年 第38回展



2013年 第39回展



2018年 第44回展



2024年 第50回展

会報に関しては、1975年の初回展に第1号が出て、それから4回まで発行されたのは確認出来ている。中村正義の美術館が保管して下さっていた。しかしいつしか会報の伝統は途絶え、齋藤鐵心氏によって2000年に突如復活する。(～2006年まで)

齋藤氏の編集では、当時東京展は本展以外にそれほど活発な動きがなかったこともあって、会員の個展やグループ展を積極的に紹介したり、カラープリントとなつてからは本展の受賞作品を紹介することなどに力点を置いたことが特徴的。

齋藤氏が東京展本体の仕事で忙しくなると同時に田所一紘に会報編集の仕事が回ってきた。私の時はちょうどカラー図録に移行する時期とも重なって、白黒印刷で良い、となった。齋藤氏時代より見栄えは地味になったが、私は会員のエッセイをメインに据えた編集を心がけた。(2007年から2013年まで担当)

そして田所も本展の仕事がいろいろ大変になったことで、片桐とみか氏へ編集が移りよりシステム化され、さらに2018年から明輪勇作氏にバトンタッチして今に至る。明輪氏の編集は、数多くある東京展の派生展(多摩展・川越展・会員展・受賞者展・関西展・グルグルハウス賞展など)にキチンと取材して東京展全体を網羅することに主眼が置かれている。バリッとしたカラー印刷で、キレがある。

会報の内容変化は東京展の在り方と密接に関係しているのだ。
(田所一紘)



1975年 第1回展 会報



2004年 第30回展



2008年 第34回展



2022年 第47回展